

JOMA 通信

1983年9月 No.22

海外宣教連絡協力会公報
Japan Overseas Missions
Association

発行者 芳賀 正

事務局 〒166

東京都杉並区成田西1-16-4 聖書宣教会気付 海外宣教連絡協力会

宣教と教会

JOMA会長 芳賀 正

「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。
「わたしには天においても地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るよう、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」 (マタイ 28:18-20)

主は宣教の働きを弟子達に委ねられた。主は宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められた。(Iコリント 1:21) しかし、残念なことは、多くのクリスチャンは、それは、教会に委ねられた主の大命令とは握っていないことである。宣教師個人の召命や、宣教団体、或は教団の宣教部の働きのごとく考えている人々が多い。

初代教会の歴史を見る時、エルサレムの教会はアレテオケにバルナバを遣わした。(使徒11:22) またバルナバはタルソに行き、サウロを捜し出しアンテオケに連れて来た。(使徒11:25-26) このバルナバとサウロ(後のパウロ)は、アンテオケの

教会から遣わされて、主の召した任務のために、宣教師として出て行った。教会は彼らに按手をして送り出したのである。(使徒 13:2-3)

パウロは、ルステラでテモテに会った。彼はこのテモテが、ルステラとアイコンオムとの兄弟たちの間で評判が良い人であることを知り、彼を連れて行きたかった。(使徒16:1-3) これらの人々は皆教会の中で、主に任えていた人々であり、よきあかしの立っていた人々であった。

宣教の働きが、個人の召命にのみ重点がおかれていたのではなく、むしろ教会が主導性をもって宣教師を送り出していたことに注目する必要がある。宣教団体が宣教の働きをするのではない。教会が、主の大命令として世界宣教に取り組むのである。

ボランティアに依存する働きは限度があるように、個人の宣教師のみに依存する宣教にも限度がある。主は「収穫が多いが、働き手が少ない。だから収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい」と教えられた。(マタイ 9:37-38) 教会は、宣教師の起されるように祈ることが必要だし、宣教師が育つように訓練することが大切だし、宣教師を送り出すようになれるように成長することが肝要であろう。宣教こそ、教会の果すべき業であるからである。日本の教会も、そのような教会へと脱皮する時が来ているのではないだろうか。

宣教師懇談会報告

さる7月15日にJ O M A加盟団体から派遣されている帰国中の宣教師と各団体の代表による宣教師懇談会を、HiBAセンターにて開催いたしました。19名の出席でしたが、宣教師達はその奉任の中でぶつかる問題等についてよき意見交換がなされました。出席者は、牧野宣教師夫妻、芳賀師(以上OMF)、福田宣教師、石川師(以上ウィクリフ)、舟喜師(聖書同盟)、鷲尾師桜井兄(東洋ローア)、佐藤宣教師(南米宣教会)、内村師(アッセンブリー)、横内宣教師、清岡師(福音自由)、エノブレ宣教師夫妻、新谷師、宮崎姉(ホーリネス)、深沢師(PBA)、渡辺宣教師夫妻(同盟、オブザーバーとして)以上の方々でした。

なお、宣教師懇談会において話し合われました内容につきましては、以下にその要点をまとめておきましたので、参考にしていただければ幸いです。

(1) 日本に関するニュースについて

- 宣教師として日本から遣わされていても日本の状況がわからなくなり、その中で宣教ニュースレポートを書くことのむずかしさを感じている。そこで、他の宣教師達のニュースレターを送ってもらい参考にしたり、また、現地の日本人会の会報や日本のラジオを短波で聞くなどして、日本を離れていても日本を知るようにしている。
- 朝日新聞などを手に入れることもできる。ただし月12,000円位が新聞代、送料としてかかる。
- 新聞をとっている人からまわしてもらい読むこともできる。
- 日本より何日分も新聞をまとめて送ってもらい読む。
- 新聞とともにそこにのっている広告、本の紹介

などもよむと有益である。

- 現地の日本語新聞を読む。ただし、記事内容が2～3日遅れることもある。
- キリスト教関係の新聞や本等も日本より送ってもらう。

(2) 現地の貧しい人々への対処について

- 簡単に与えると他の人々を誘ってやってきたりするので問題もある。
- 現地の人々をお手伝いとして用いることによって助けることにもなる。
- お金を求めて宣教師のところに来る人もあったが、そんな時は、草を刈るなどの働きをさせてバス代などとして渡すこともあった。
- 宣教団からはお金をあげるなど言われていたが、かわいそうになってあげたこともあったが、後は必ずしも良くなかったことがわかってきた。お金をあげてもそれを利用し、働かずにいることも多い。そこで、現地の信頼できる人にそのような問題を相談するようにしている。
- 現地教会にて助け合うこともある。

(3) 子供の教育について

- 日本人学校を考えていたが、遠くてできなかった。宣教師夫人が通信教育をしている。そして3ヶ月に一週間、日本人学校に入れる。
- 私達の団体では宣教師の10人に1人は教師であり、フィリピンでは300人のメンバーの30人が教師である。そのように教育宣教師として派遣されている人々がいる。現在、団体では各国別のカリキュラムを作成中である。また、山地に入る時には、教師が2～3ヶ月間のテキスト等を作ってくれる。子供が大きくなると子供は町にのこしていく。
- ブラジルでは日本人学校は5つある。しかし、そこは、移住者扱いの人は入れず、日本の会社

などから派遣された人々の子弟のためのものである。そして、移住者と派遣者との間に隔りがある。そこで、子供は現地の学校に入れている。

- OMFは自国語で教育を受けさせるとの方針であり、OMFで学校をつくっている。ただし、日本人は子供がまだ少ないのでできていない。
- 大きくなれば、子供を日本の家庭に預ける。しかし、兄弟が多いと一家庭に何人も預けることもできないので、兄弟間の交わりの問題もおこる。
- 子供との交わりを大切にし、夕食後は原則として仕事をせず、家族との交わりとする。

(4) 送る側と送られる側との問題について

- 宣教師がおこされてから支援組織が作られたために、規則なども、現地の人との結婚などといったいろいろな問題がおきて後に作られてきた問題がある。
- 送り出す側も送られる側も初めてだとすべてが前例となってしまう。米国等の団体及び宣教師のあり方を参考にすべきであろう。また、送り出す側の責任者達が牧会をしていることからくる配慮の不足があり、片手間の委員会ではむずかしい。
- 先駆者がいる場合は、後に続く宣教師はすべて備えられているので、やりやすい。また、送り出す側が現地の宣教団に権限を大きく与えた方がやりやすい。
- 宣教師経験者が送り出す側にいると事務局の人にも宣教師訓練を受けているので、非常によい面がある。

(5) 現地での日本人宣教師間の交わりについて

- インドネシアでは6回になるが、毎年1回日本人宣教師の交わりを持っている。そこで、宣教師がかかえている諸問題について共に語り合

うこと、またテーマがあつて、テーマについての学びと発表を行なっている。昨年は子供も含めて32名の出席であった。期間は1週間位である。

- 現地の日本人宣教師と夕食等を共にして交わりをもっている。しかし、現地の日系牧師より反発もあるので、日本人宣教師だけの交わりを持つことが良いかどうか疑問もある。
- タイには、タイにいる中国人宣教師30人位が集まりを持ったために、現地の教会より、なぜ中国人だけなのかといった批判もでた。
- 現地での日本人宣教師会の働きと日本の送り出している団体間の関係はどうか。各団体をこえて宣教師会が走りすぎる問題はないか。

(6) J O M A への要望について

- J O M A が交わりである以上、現在加盟していない団体も入りやすいので、門戸を広げてよいのではないか。
- 教育宣教師を送ることについてを J O M A などと考えてはどうか。
- A S E A N の動きとして、教育宣教師が入りにくくなっている。現地人をそのために雇えという方向にある。たとえば、ドイツ人の教師を教育宣教師として招くのではなく、現地人でドイツ語を話せる人を雇えというようにである。
- 日本に宣教師の子弟を預かるホステルを作ってはどうか。ホステルベアレンツを J O M A で考えてはどうか。
- 教育宣教師が送られても、子供達が少人数では効果的には疑問点もある。欧米など人数の多い場合は子供同士の交わりもできるが、しかし、日本人は少ないので問題があるのではないか。

(文責 J O M A 書記 清岡)

書評 「宣教地に生きる ———

これからの海外宣教」

小川 国 光 著

著者は、OMF最初の日本人宣教師として1973年にインドネシアに派遣され、第三期奉仕中の現職宣教師である。日本人宣教師による宣教論としては見のがせない好著の一つになろう。

第一章（宣教地での心のふれ合い）では、10年間の奉仕中に経験した出来事の中から三女の召天、町の暴動がとりあげられている。読者はこの悲しみと恐怖、そして緊張の中から、ご夫妻が「さらにインドネシアの人々を深く知り、心のふれ合いを味わっていった」のを知らされて励まされるに違いない。

第二章（インドネシアの教会に遣わされて—宣教地の教会形成）で注目したいのは、著者が宣教地の教会形成のために、宣教師として何をすべきか、何をすべきでないか（責任分担）を自覚しておられる点である。過去に宣教団が経験した「経済援助その他に関する多くの失敗と苦々しい体験」から生まれた教訓と原則をしっかりとらえ、特に「現地の働き人の指導下に自らをおいて」健全な協力関係を保ちながら、すばらしい主のみわざと教会成長を見ておられる。日本在住の宣教師にとっても学ぶところ大であろう。

本書の最大の意義は、第三章（これからの海外宣教 — 宣教地からの宣教論）にある。「宣教地の教会の真の独立と成長は、宣教地の信者によつてのみなされてゆくものです」とのことばに著者の宣教姿勢がみられる。ここで日本人宣教師の諸問題、教会観の再検討等、七つのトピックが論じられており、健全な聖書の宣教を心がける宣教師と、送り出す側の責任（育成と訓練）そして国際的宣教協力の必然性など、宣教に関わる私たちが真剣に受けとめなければならぬ問題が沢山ある。（いのちのことば社・B6判・119頁・880円）

— 1983年度 JOMA 総会報告 —

さる、4月11日(月)に1983年度 J O M A 総会が、お茶の水学生キリスト教会館にて開かれました。議事録はすでに各団体に送られています。役員の変更が行なわれ、新年度事業計画も決定されましたので報告させていただきます。

(1) 新年度役員

会 長 芳賀正師 (O M F)

副会長 内村サムエル師 (アッセンブリー)

会 計 石川学師 (ウイクリフ)

書 記 清岡卓生師 (福盲自由)

(2) 新年度事業計画

① 帰国中の宣教師懇談会の開催

② 牧師のための宣教セミナーの開催

③ J O M A 通信22号 23号の発行

④ J O M A 宣教地図の発行

なお「宣教師の語る海外宣教 — 海外宣教を志す人のためのガイドブック —」が500部残っていますので必要な方は事務局まで申し込んで下さい。

—— 牧師のための宣教

セミナーの御案内: ——

牧師のための宣教セミナーを以下の通り開催いたしますのでぜひふるって御参加下さるようお願いいたします。

日程・11月17日(休)~18日(金)

場所・お茶の水学生キリスト教会館

講師・デニス・レイン師 (O M F)

内容・①聖書と海外宣教

②海外宣教と牧師

③地域教会と海外宣教

④海外宣教へのとりくみ

⑤宣教地の現状

登録費・2000円

※宿泊は各自で御都合下さるようお願いいたします。